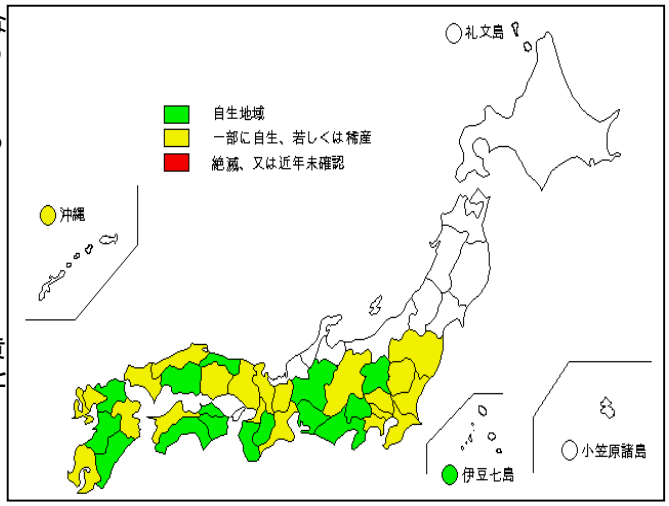
#113

クモラン

Taeniophyllum glandulosum Blume

クモラン（愛知県奥三河　09.07/05）

寒冷地を除く全国に自生する小型の着生蘭です。特徴はなんといっても葉も茎と呼べるものも存在せず、根の塊のような奇妙な姿をしていることです。放射状に根を張り、大きくてもせいぜい直径5cmの小さな塊を形成します。養分の摂取は根にある僅かな葉緑素による光合成と、共生菌に頼っているようです。腐生蘭以外で葉を全く持たない蘭は日本ではクモランだけです。梅や桜、杉の生木に好んで着生し、しばしば折り重なるように密集して自生します。カヤランやヨウラクランなどと好む環境が似ており、良く同じ木に着生しているのを見かけます。ウメノキゴケの生える渓流沿いの梅林などで比較的普通に見られます。 7月頃に根の中央部（一応茎に該当する部分）より僅かに花茎を伸ばし、黄緑色で極めて小さく地味な花を咲かせます。花は2～3mmとマクロレンズで撮っても全開なのか蕾なのか判断に困るほど小さいです。群生している枝では、根に根が絡まって個体数を数えることが出来ないほど混沌としています。



寒冷地を除く全国の冷涼な山地に自生します。

クモラン（愛知県奥三河　09.07/05）

知らない方は一見して蘭であるとはわからないと思います。一言でいうと「極めて地味で不思議な蘭」です。当地中部地方の山岳部では、川沿いの梅の古木には大抵ついています。杉林の林道を散策していてもよく小枝について落ちているため相当数の自生があると思われます。ただ地味すぎて発見しにくい為、多くの方には珍しい蘭と思われています。栽培も出来ず観賞価値も低いため、ものめずらしさにたまに採集される程度で、ラン科にしては珍しく盗掘による自生地へのダメージはほぼ皆無です。 ただ、里山の開発や枝打ちや間伐などの手入れがされなくなり林が暗くなったことなどから、昔よりは自生が減っていることは確かです。また、生育して行くためには十分な湿度が必要なため、川や沢沿いに分布が集中します。

Document and photo by LittleFlower 2009

栽培は不可能です。というよりも栽培なんてしないで下さい。ただ「変わっている」というだけで特に観賞価値はありませんし、まず枯れるので栽培する事自体ナンセンスです。厳密に言えば、庭木に勝手に生えるのも栽培という解釈もできますが、木から剥がしてヘゴやコルク、又は別の木に再着生させても長期栽培は出来ません。生木から栄養を貰っているわけではなさそうですが、まだまだ未知の部分が多い蘭です。ですから希に野草店やオークションなどで売られることはありますが、100%盗掘品で、しかも育たないため絶対に購入はしないで下さい。ちなみにこの独特な生育形態は、単子葉植物の中で最も進化を遂げた蘭科植物の中でも進化の頂点であるといわれています。 増殖も天任せです。株繁殖は一切しないため、種子による増殖が全てです。どうしてもご自宅でこの珍奇な蘭を見たければ、種子を庭の梅や桜、杉の枝にこすり付けておけばクモランが生えてくる可能性は十分あります。現に田舎の庭木にもよく着生しています。

渓谷沿いの立ち木(愛知県奥三河09.06/07)

枯れ枝に着生したクモラン(愛知県東栄町09.03/21)

クモランは一属一種なので近縁種はありません。(海外にはネパール近辺のChiloschistaや幽霊蘭と呼ばれるPolyrrhizaなど、クモランに似た蘭は存在しますが、いずれもクモランよりも数倍大型で、花も大きく観賞価値が高いです。)

Document and photo by LittleFlower 2009